



1



2

キッズスタジオ・プログラム ～子どもを対象とした教育普及活動

キッズスタジオを中心として、2007年度～2009年度についても子どもや親子連れなど幅広い年齢層に向けた鑑賞や造形を取り入れた表現活動を行った。

土日祝日などの休日には「ハンズオン・まるびい!」と題して継続的にプログラムを開催した。親子連れでの来館者を主な対象として、子どもから大人まで参加できる表現活動の場を設けた。

プログラムの形式は大きく2つに分かれる。一つはワークショップ形式で、対象年齢や定員、開始時間を定めて参加者を事前募集して行った。鑑賞ツアーや造形表現にじっくり取り組むプログラムを毎月1回程度企画した。もう一つはプレイルームと呼ぶ形式で、開場時間内は自由に入出入り可能で、子どもから大人まで参加できる内容のものを行った。素材や技法によって分かれた2～3種のエリアから、参加者が

自分で選んで取り組むことができるようにした。

テーマには展覧会や作品、身近にある素材や季節の自然物などを取り上げた。またキッズスタジオ・プログラムとして独自に作家を選定してのワークショップや講演会も企画した。これらの運営はエドューケーターを中心に展覧会担当者らと協議して進めた。

2007年度：

展覧会関連では鑑賞ツアーのほか、作品制作では「パッション・コンプレックス」展において家族の肖像写真を撮影したり、「コレクション展」では出品作家の山崎つる子を講師として、印刷された人物像を出発点にした絵画制作を行うなどした。また「日比野克彦アートプロジェクト『ホーム→アンド→アウェー』方式」にちなみ、朝顔の成長に合わせて絵日記や花染め、ソルを素材とした造形などを展開した。これによ

り年間を通して内容に関連性を持たせることができ、リピーターの増加にもつながった。²

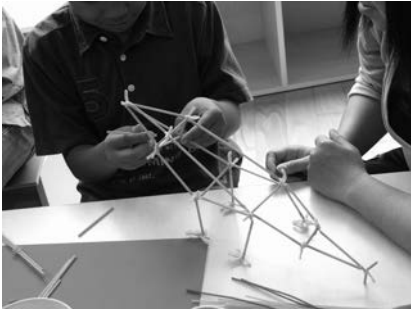
2008年度：

展覧会関連では各展の鑑賞ツアーのほか「ロン・ミュエック」展で粘土を素材に人物像を制作するなど、造形のワークショップも行った。「金沢アートプラットホーム2008」展については継続的に関連プログラムを行い、出品作家の丸山純子やKOSUGE1-16、高橋匡太とともに展示作品の一部と一緒に制作するワークショップを行った。

スタジオ独自のプログラムも充実させた。プレイルームの中では身近な自然にこまやかに目を向けることをテーマに、秋には植物の種子、冬には雪の結晶などを取り上げた造形プログラムを行った。また春休みの特別プログラムとして岩井俊雄を招き、アーティストが自分



3



5



4

1. 2009年度
プレイルームの様子
2. 2007年度
「日比野克彦アートプロジェクト」関連より
「明後日朝顔のツルで遊ぼう」
3. 2008年度
「いわいさんと『リベットくん』を作ろう!」
4. 2009年度
「オラファー・エリアソン」展関連より
「色・いろいろ感じよう」
5. 2009年度
プレイルームの様子

の子どもたちとの遊びで培った作品をベースに親子向けのワークショップを行ったほか、講演会や作家のディレクションによるプレイルームを開催した。³

2009年度：

「愛についての100の物語」展では複数のプログラムを展開した。展示会の感想を吹き出しに書き残すワークショップを行ったり、「アートモール・スクール・プロジェクト」の記録・広報展示を行うなどした。収蔵作品を活かしたものでは、「コレクション展」でパトリック・トゥットフォコ《バイサークル》の鑑賞とともに、参加者の身近な人をイメージした乗り物型の作品を制作した。

「オラファー・エリアソン」展のワークショップでは、作品の特性を鑑みて、立案に際して金沢工業大学感動デザイン工学研究所の協力を得て企画運営を行った。視覚や認知を専門とする教員や学生により子ども向けと大人向けのワークショップを実施した。アート以外の専門領域との連携であること、また大学生も研究領域を

活かした専門家として参画したことなどが特徴といえる。⁴

これらの3年間を振り返って新たに感じたことは、展示会ごとに適した鑑賞や表現の手法は異なり、それは担当キュレーターとの協議はもちろん、様々な視点を持つ専門家との交流の中から発見されるものも多いということだ。アート以外の専門領域の研究者と連携した事例では、「深く観る」ことについての新たな視点や気づきを得ることとなり、参加者も我々スタッフも、作品や身の回りの世界に対しての新たな認識を得られた。こうした立案手法は美術館活動の地域への広がりという点から今後も継続したい。

また、年間で共通したテーマを随所に織り込むことで、来館者にとって次の展開への期待感が生まれていた。季節が変わっても共通のキーワードがあることで場所への親しみが湧き、繰り返しの来館への楽しみに広がっていたようである。そしてスタッフと保護者との会話やアンケートによると、例えばストローのような日用品

を立体構造を作る素材として使うコーナーで、子どもが夢中になって取り組んでいる様子が注目されているなど、身近な物でも意識の変化で風景を変えるものになることが、子どもたちの様子を通じて大人にも伝わるメッセージとなっていた。⁵

これらは週末ごとに運営方法を整理しながら積み重ねてきた成果であるが、一方で平日の来館者への対応という取り組みも課題としてある。2007年度には平日の乳幼児連れの来館者に向けた美術館ツアー「ママパパ向けまるびいガイド」を冬季に4日間行った。授乳・託児の施設機能の紹介と合わせた館内ツアーだが、乳幼児を伴う来館者にとっては日時を決めたプログラムは予定通りに参加しづらい場合もあり、今後の平日プログラムの実現に向けて、その形態を工夫したい。

(木村健/エディューケーター)

[注] 活動内容の一覧は付録CD-ROM内のデータを参照